

【研究ノート】

モンゴル語学における若干の先行研究

——音声学・音韻論関係の紹介とコメント——

城 生 佰太郎

Several important papers in Altaic Linguistics :

Phonetics and phonology

JÛO, Hakutarô

0. はじめに

本学でも、アルタイ言語学領域（具体的にはモンゴル語学分野）で修士論文や博士論文を執筆する学生が出てきたので、論文指導上の利便性を考慮して、とりあえず筆者の手もとにある斯学における若干の音声学、音韻論に関する先行研究を取り上げ、平易に解説を行うこととする。

なにぶんにも、アルタイ言語学そのものがマイナーな領域であり、しかも発表件数が圧倒的に少なかったり、発表された書籍・雑誌類が特殊なものであったりするため、文献を渉猟するだけでも並々ならぬ努力を要する。しかも、今日ではモンゴル語学分野の研究にはモンゴル語で書かれた文献の利用が避けられないこともあり、その点でこのような研究ノートの存在はこれからこの分野で論文を執筆しようとしている学徒には、多少は裨益するところがあると思われる。従って、ここに手持ちの文献の中から適当なものを選び、コメントを行うこととする。

なお、以下に展開する先行研究は、発表年の順に配列する。また、中には必ずしもアルタイ言語学のみにかかわるものではない文献もあるが、そ

のような場合にはアルタイ言語学に深く関わる部分のみを中心として取り上げることにする。

1. N.S.Trubetsky (1939) 『音韻論原理』

ブラーグ言語学派を代表する音韻論の重鎮 N.S.Trubetsky (トゥルベツコイ) が残した、ヨーロッパ構造言語学を代表する古典的音韻論の名著。彼は、音素を知的意味の弁別に有意な最小の音的単位としてのみ認め、いっぽうで示差的対立を示さない音声現象をすべて抹殺してしまった。ただし、さすがに気がとがめたのか「音声文体論」などと称する研究分野の可能性を示唆して、別の角度からは音声現象と向き合う姿勢を示すことも忘れていない。

その彼が、エレガントに解き明かしたモンゴル語第2音節以下に立つ短母音の音韻論的解釈を論じた部分が次の引用部分である。

最後に、(i 以外の) 他の何らかの母音を持つ音節の後では、一方では u-ü, o-ö, ö-e, o-e の音色の対立が中和され、他方では o-u, ö-a, e-a の開口度の対立が中和され、それによって次のような部分体系が生ずる：

A

U I

これらすべての点は蒙古語¹の長母音についてしか当てはまらない²。短母音の場合は、i を含む音節の後ですべての音色の対立が中和され、その結果3段階の線状体系が生ずる：

a

e

i

その他の母音を含む音節の後では、この体系がさらに縮小し、2つの短母音音素“i”と“e”しか残らず、“e”はその都度の先行音節の母音の音質を帯びる。

(トゥルベツコイ、長嶋善郎訳 1980:121-122 より引用)

以上に述べられているとおり、Trubetskoy は母音調和を有するモンゴル語のようなケースでは、第1音節の母音さえ決定してしまえばあとは「左へならえ！」式に無条件で第2音節以下の短母音の音価が決定され、このためいわゆる対立的価値を持たないことになるのだから、これら第2音節以下の短母音はひとまとめにして扱うのが妥当であるという主旨である。ちなみに、原著では明言こそしていないが、この考え方に従えば Trubetskoy の言う“e”は、Street (1963) などの/a/とする解釈と同じになる。

ところで、音韻論的解釈というものは今さら改めて指摘するまでもなく、論理的整合性さえ保証されればどのような解釈論も成り立つ。すなわち、これが思弁的営みであるからにほかならない。しかしながら、これも衆知のとおりだが音声学では何よりもまず事実の確認が重要である。さらに、それを単なる物理事象として定量化するだけでは不十分であり、最終的には聴取者の認知・理解を視野に入れた実証的研究が生命線となる。ただし、心理学的研究とは目的の点でも方法論の点でも一致しないので注意を要する。なお、「実験音声学」を「音声科学」とは異なる自律した研究分野であるという主張は、城生佰太郎 (2005, 2006) その他を参照されたい。

さて、このような観点から先に挙げた Trubetskoy の研究を見なおしてみると、

その他の母音を含む音節の後では、この体系がさらに縮小し、2つの短母音音素“i”と“e”しか残らず、“e”はその都度の先行音節の母音の音質を帯びる。

という部分に「ヒッカカリ」を覚える。つまり、引用部分の1行目は体系について論じているので特に問題はないが、2行目にある「“e”はその都度の先行音節の母音の音質を帯びる。」は、いかがなものか？ 少なくとも、筆者は音響音声学的方法を用いて精査する必要がある事象であろうと考えている³。

さらに、たとえば/gold/などの例では、常に/H-L/というピッチパターンが安定して現れる。そこで、この部分を sound spectrograph を用いて精査してみると、明らかに弱化母音とこれに見合ったピッチ・パターンが確認される。図1に、その証拠を示す。

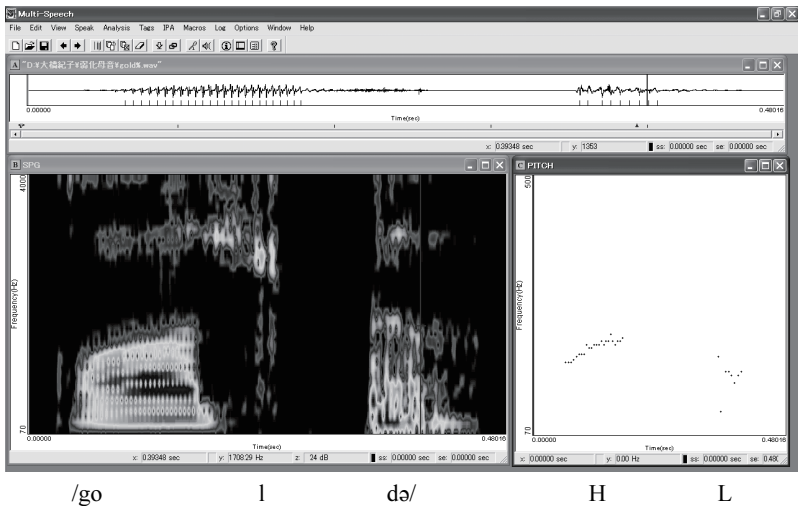


図1 弱化母音の存在とピッチ・パターン

すなわち、従来の音韻論的解釈では一般に1音節語の/gold/と解釈されていたものだが、音声学的には2音節の[gol-də]とすべきものであることが、ここからわかる。これに類した例は、それほど多くはないが確実に現代モンゴル語には実在する。従って、城生佰太郎(2001)では従来の(1)強母音、(2)弱母音、という2分法に異を唱え、あらたに(1)強母音、(2)中

強母音、(3) 弱母音、の3分法として、弱化母音に程度差を認めたのであった。なお、この路線をさらに延ばしてゆくと、/aduul/,/odoo/,/emeel/…など語頭に立つ母音であっても、1 単語内で他の位置に長母音や二重母音を伴う例では、語頭の/a/,/o/,/e/…などを新たに弱化母音の仲間として認める立場も見えてくる。

ただし、この点は音韻論との関係から見るときわめて重大である。なぜならば、もしもこの位置に立つ短母音をも弱母音の仲間に入れると、この位置に立つ弱母音だけがいわゆる音韻論的対立を持つことになるからにほかならない。しかし、だからといってこの種の母音を弱化の仲間に入れないと、今度は音声学的に大きな矛盾に突き当たる。すなわち、従来の研究によって明らかにされているところでは、アクセントを音声学的観点から類型化する際に **stress** (強弱アクセント) と判定するためには、程度の差はともかくとして、1 単語内に必ず弱母音が存在していなければならないとされているからにほかならない。

以上をまとめると、モンゴル語が音声学的観点から強弱アクセントであるとする従来の見解に特段の不都合が認められていない現状から判断すれば、先に指摘した長母音、二重母音を従える語頭の短母音は、弱母音の仲間であるとする見解が妥当であるということになる。

2. 服部四郎 (1951) 「蒙古語⁴ チャハル方言の音韻体系」

導入部は、かなり冗長だが、これが「記述言語学的研究」たるゆえんである。対象とする方言がチャハルなので、モンゴル国の標準語的地位にある首都ウランバートルで話されているハルハ方言とはかなり異なる。しかし、私がこの論文でもっとも評価しているのは、p.339 以下の「音節の構造」に展開されている部分で、(1) 弱化母音、(2) プロソディー情報の参照、の2点である。

(1) については、モーリス・グラモンの「漸弱漸強音」⁵を理論的根拠として音韻論的音節の画定を行っている (p.342ff など)。従来の説が調音音

声学一辺倒であったことを思えば、原始的なツールとはいえ、ルスロ考案の Kymograph (キモグラフ) の視点に立った指摘をしているところは、まあ一見科学的にはみえるが、服部氏自身はいっさい実験をしていないというのはただけない。さらに付け加えておかなければならないことは、これとても所詮は発出側からの論理にすぎないということで、音声情報の究極の目的である「認知・理解」を視野に収めるのに不可欠な「聴取側」からの論理がスッポリと抜け落ちている点である。

(2) については、p.347ff の「五・6」であざやかに述べている。「本」を/bicägä/⁶のように3音節と解釈しうる根拠を、ピッチの社会習慣的配置パターンに求めている。私は、このアイディア自体は A.マルティネの prosodème (プロゾデーム) にあるのではないかと睨んでいるが、基本的にこの考えを高く評価している。

前節に述べた Trubetskoy の影響が大きいため、音韻論は示差的機能のみに特化して言語音を抽象化してしまった。このため、たとえば「○○語らしさ」を伝える部分はすべて「異音」として処理された。また、フランス語、トルコ語、朝鮮語、モンゴル語、トゥングース語など、アクセントがいわゆる示差的対立を持たない言語の音声研究そのものが、それ以降の短絡的な考え方を好む研究者たちによって「音韻論的に無意味なアクセント」と呼ばれて軽視されたため、これら非示差的アクセントを有する言語のアクセント研究は目を覆うほどの衰退ぶりを呈してしまった。

服部氏による上記論文は、まさにそのような情勢下であって、世界のあらゆる言語には例外なくアクセント素そのものは実在する。ただし、たった1種類のアクセント素しか持たない言語もあって、これが見せかけ上「非示差的アクセント」として認識されているのだということを後に服部四郎(1973)などで説くことになる、重要な伏線として捉えるべき業績であろう。

3. 金田一春彦（1967）『日本語音韻の研究』

第2論文に収録されている「音韻論的単位の考」の原題は、副題に示すとおり「高さのアクセントはアクセントにあらず」という。日本言語学会のS40年度春季大会で発表されたもので、通常は25分の発表時間のところ、1時間を過ぎてても質疑応答が途絶えることはなかったため、議長裁量により時間切れが宣告されたという、いわくつきの論考である。

金田一先生も完成期を迎えておられたためか、パートランド・ラッセルを担ぎ出して大上段に構えていらっしゃる。しかし、アクセントの高低タイプと強弱タイプとを峻別するのに、ラッセルのいう「項と項との関係」などという大げさな哲学論を引っ張り出さなければならない必然性は、ほとんどないと思う。

まあ、私たちのスタンスとしては、思弁的ではなく科学的にこのアクセント類型にチャレンジし、特に弱化的の激しいタイプに属するのではないかと思われるモンゴル語の分析をとおして、アクセント類型における弱化的母音の捉え方を、音響音声学的観点から虚心坦懐に論じられれば一歩の前進ではないかと思うのだが。

それはともかくとして、繰り返しになるが、本論考はアクセントの類型化にとってバイブルのようなものである。なぜなら、たとえば音響実験だけに頼っていたのでは、当該言語のアクセントが pitch（高さ）なのか stress（強さ）なのかが必ずしも明瞭には捉えられないからにほかならない。その証拠として、図2～5に日本語の「朝」と「麻」、英語の *subject* と *subject* の音響データを示す。

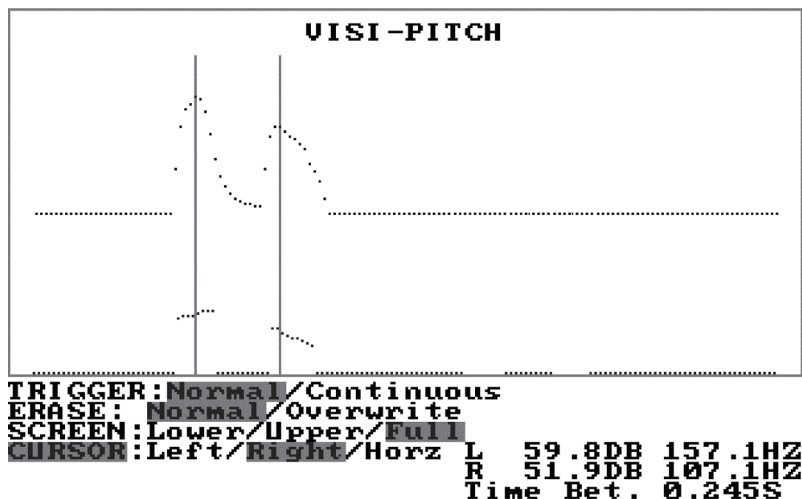


図2 「朝」のピッチ（高さ）とインテンシティー（強さ）

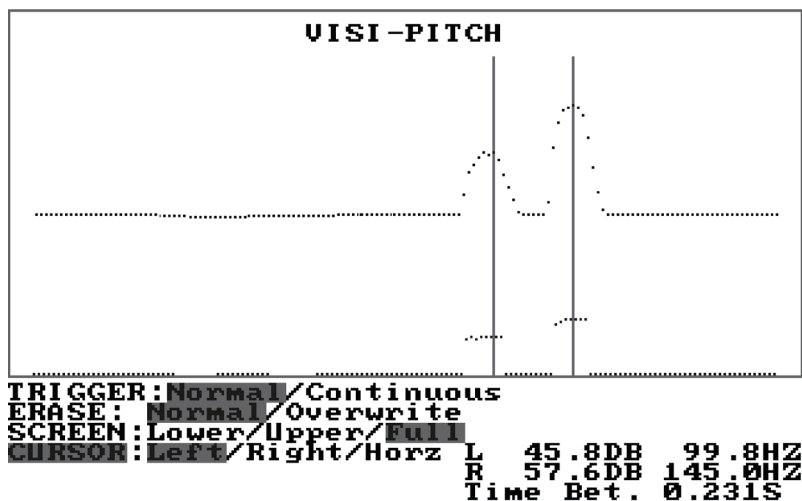
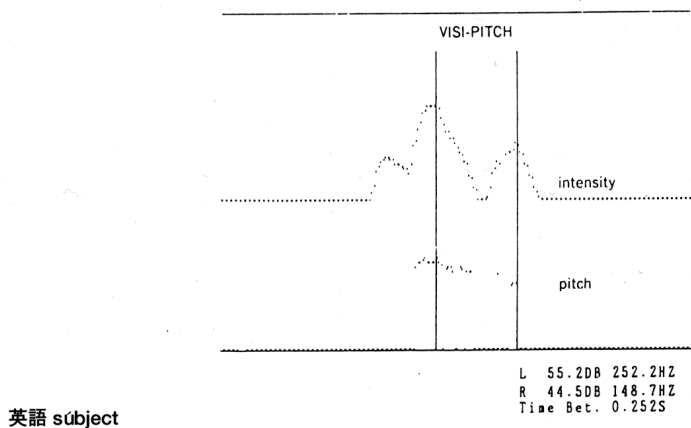
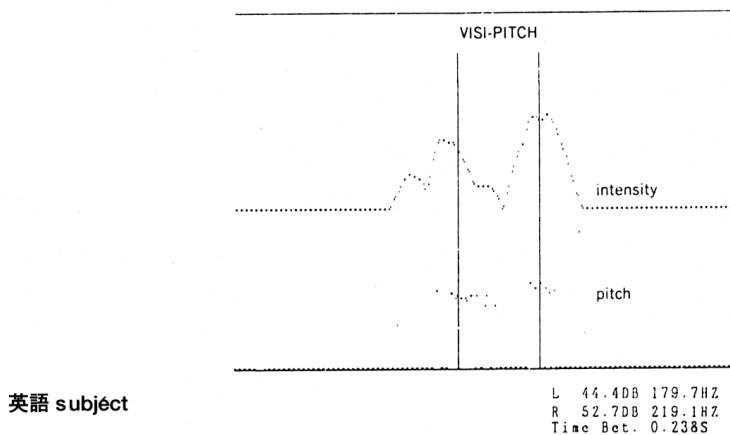


図3 「麻」のピッチ（高さ）とインテンシティー（強さ）



英語 subject

図4 subject のピッチ（高さ）とインテンシティー（強さ）



英語 subject

図5 subject のピッチ（高さ）とインテンシティー（強さ）

図2～5で用いた音響解析機器は、KAY社製のvisi-pitchである。図では、差別化を図るために日本語のデータを太字で示し、英語のほうを細字で示した。図の上段は物理的強度を示すintensity、下段は物理的高さを示

すpitchが描かれている。日本語のデータでは、図2の左側のカーソルが「朝」の「ア」をさし、右側のカーソルが「朝」の「サ」をさしている。この位置での物理情報が右下に出ていて、これを読むと「朝」の「ア」は 157.1 ヘルツの高さで、59.8 デシベルの強さであり、「サ」は 107.1 ヘルツの高さで、51.9 デシベルの強さであることがわかる。いっぽう、「麻」のほうも図3から同様にして「ア」は 99.8 ヘルツの高さで、45.8 デシベルの強さであり、「サ」は 145 ヘルツの高さで、57.6 デシベルの強さであることがわかる。

ここで、非常に興味ある現象は、日本語は高さアクセントであると言われているにもかかわらず、高いところは必ずそれ相応に強いということなのである。この点で、次に見る英語のデータも決して例外ではない。図4は、第1音節に stress のある *subject* を解析したものだが、stress のある位置では高さが 252.2 ヘルツで強さが 55.2 デシベルあり、stress のない位置では 148.7 ヘルツで 44.5 デシベルであった。同様にして、第2音節に stress のある *subject* も、stress のある位置では高さが 219.1 ヘルツで強さが 52.7 デシベルあり、stress のない位置では 179.7 ヘルツで 44.4 デシベルであった。

以上の解析データから窺知されることは、少なくとも日本語と英語を対照させた限りでは、物理量としては高いところはそれなりに強くなり、低いところはそれなりに弱くなるので物理データだけを見てもどちらが stress でどちらが pitch と呼ぶにふさわしいアクセントなのかは、わからない。だからこそ、本論文で金田一春彦の主張する「主従関係」=stress、「対等関係=pitch」という明快な対応付けは、斯学における文字通りの金字塔足りえたのである。

4. Надмид, Ж., Ц. Жанчивдорж, Б. Рагчаа (1968): Монгол хэлний зүй, Авиа зүй, Зөв бичих дүрэм, Ардын Боловсролын яамны Хэвлэл, У. Б.

モンゴル人のために、モンゴル語の音声と正書法を説いた著名な小学校の教科書。全部で 53 章から成り立っているが、アクセントに関しては、31

章と 32 章に述べられている。31 章は母語における固有語のアクセントであり、32 章は外来語のアクセントを扱っている。以下に、一部を引用する。

2 音節以上の語では、それぞれの音節に立つ母音は同じアクセントでは発音されず、かならずどちらかが明瞭に強く発音される。たとえば、тэнгэр という語に含まれる 2 つの母音 э の場合、はじめのほうが 2 番目よりも、強く明瞭に発音される。また、багатгасан という語にふくまれる 4 個の а では、最初の а だけが最も強く、2 番目以降はあいまい化する。

このように、語の第 1 音節に立って、他の音節の母音よりも強く明瞭に発音される音節を「アクセントのある音節」という。モンゴル語では、語の第 1 音節にアクセントが落ちる。したがって、語の第 1 音節に立つ母音を「アクセントをになった母音」、第 2 音節以下の母音を「アクセントのない母音」という。

また、長母音と二重母音も語のどの位置にあるかによってアクセントをになったり、になわなかったりする。たとえば、агаар の場合、最初の а にはアクセントがあるが 2 番目の аа にはアクセントはない。いっぽう、надам の場合には最初の аа にはアクセントがあるが、2 番目の а にはアクセントはない⁷。

さらに、後置詞などの非自立語には、アクセントはかからない。たとえば、ширээн дээр (壁の上に)、хот руу (街のほうへ) などの дээр や руу は、アクセントをになえない。

以上で明らかなように、モンゴル人ネイティヴによるモンゴル語のアクセントの説明は、常に語の第 1 音節に強さがあるとす、きわめて単純なものである。しかしながら、言語事実のほうはそれほど単純ではない。その証拠として、図 6 に/asuux/と/arab/を並べてみる。もちろん、上に引用したНадмидたちの説が正しければ、/asuux/の/a/と/arab/の/a/はほとんど

同じ強さになるはずである。しかし、解析データはそうっていない！

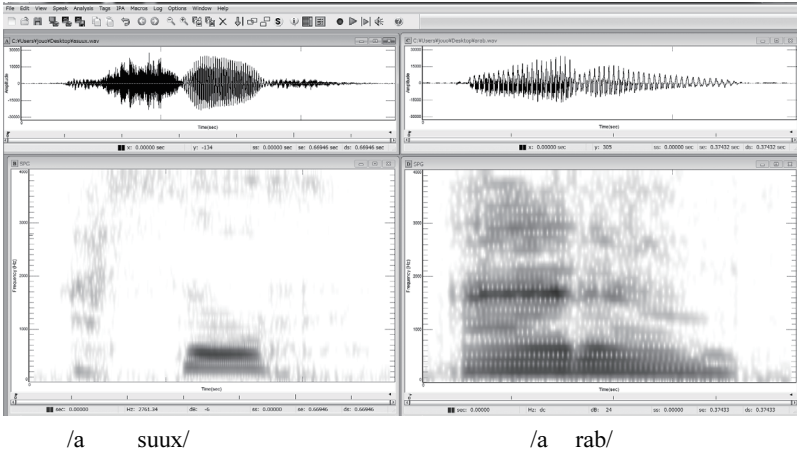


図6 /asuux/と/arab/

図6からわかることは、やはりモンゴル語も金田一春彦(1967)の主張する基準に照らし、stress型のアクセントであるということである。従って、くどいようだがこの第1音節の短母音は弱化母音の仲間に入れなければならない。

デンマーク人のOtto Jespersenが書いた英文法書である*The Philosophy of Grammar*が傑出しているように、とかくネイティブ・スピーカーというものは言語を具としており、学問の研究対象としては見ていないので、案外気づかないで見落としている事実も多い。たとえば、町を歩いているフツ一の日本人を捕まえて、「サンボン(三本)」、「サンニン(三人)」、「サンカイ(三回)」、「サン(三)」に出てくる「ン」の発音は何通りありますか?などと訊いても、おそらくはまともな答えなど返ってこないのと似ている。この点で、非母語話者であっても、研究者の行う指摘には鋭いものが含まれており、傾聴に値することが多い。

5. 服部四郎 (1973) 「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？」『言語の科学』第4号、東京言語研究所

「すべての言語、すべての方言はアクセント素を有する」「モンゴル語やフランス語などのアクセントは、ただ1種類のアクセント素しか持たないため対立がないだけであって、アクセント素そのものは存在する」という主張のもと、非示差的なアクセントをも、十分に音韻論の研究対象とすることができることを説いた卓見。金田一春彦などに影響を与えた。

服部氏は、たまたまモンゴル語のような非示差的なアクセントを有する言語を研究対象としていたところから、この考えを音韻論的側面からかなり強く主張している。しかし、もう一方の側面に控えているはずの音声学的側面からの言及がもの足りなく、結果としてバランスの悪い論調となっている。

なお、服部四郎に先立って、フランスの A.マルティネが 1950 年代の終わりごろに類似の概念を *prosodème* (韻律素) と呼んで注目しているところから、服部氏がこの考えに影響を受けた可能性も否定できない。

また、J.R.Firth を代表格とするロンドン学派による “prosody” は、音節構造・鼻音化・母音調和など、ありとあらゆる連音要素を「プロソディー」と呼ぶところから、アメリカおよびこれの傘下にある日本などでは「単位というには、範囲が広すぎて茫漠としている」という理由で無視されているが、そもそも茫漠としている人間の所産である言語音だけが、截然とした極小単位に収まるというアメリカ流の機械主義的発想自体に不可解とところがある。

以上をまとめると、アクセント現象を音韻論的側面からもっとも狭義に捉えるのが多くの音韻論学派にみられる「示差的特徴を有する対立的価値」である。逆に、もっとも広義に捉えるのがロンドン学派による “prosody” である。したがって、服部四郎の「アクセント素」は、この中間に位置するということになるろう。

6. 服部四郎 (1975) 「言語音の耳による観察と機械による実験」

『音声言語医学』16-1:6-15. 音声言語医学会

音声言語医学会からの依頼講演で、服部氏が述べたことを文字化したものの。当時の人たちには、音響音声学という時代の先端を行く実験データに対して、あいかわらず旧態依然とした「耳による観察」の重要性を訴えており、アナクロニズムもはなはだしい、と映ったようだが、私はそうは思わない。

ネウストップニー氏の指摘以来注目された「イノチ (命)」のアクセントが、音響実測によるピッチカーブでは M-H-M-L のような姿をしており、特に第1モーラが内省型と著しく異なって M-H となる点を中心として、所説を開陳している。服部氏によると、音響的特徴はどうであれ、要はどのように聞こえるかが重要で、その証拠に意図的に調音した L-H-L の「イノチ」と自然言語音の「イノチ」を比較すれば、両者は歴然と異なると言っている

この主張を、今日的レベルから捉えなおしてみると、服部氏の言わんとするところは決して旧態依然とした調音音声学礼賛ではなく、言語音の究極の目的は脳における聴覚情報処理の営みにあるという命題を、1970年代という早い時期に、実に的確に指摘していたと捉えることが可能である。

7. 城生佰太郎・三上 司 (1981) 『モンゴル語のアクセント——オートセグメント理論による分析』

非線形音韻理論の草分けである Goldsmith の提唱した Autosegmental Theory をモンゴル語のアクセントに適用してみた習作。服部四郎の指摘以来、ピッチに注目していた私にとって、たまたま好都合な枠組みを持っていたので生成音韻論にも興味を持った「若気の至り」である 1 篇。

導入の部分に、モンゴル語学におけるアクセントの研究史が簡単にまとめられているので、ここは利用価値がある。ただし、後半は AT の正当性を主張すべく、あやしげなデータなども使われており、今見ると寝覚めが悪い。

やはり、功をあせるの余り事実を軽視するという、理論研究においてはありがちである浅薄な側面を露呈している点は、悔い改めなければならない。

8. Svantesson, J.O. (1985): "Vowel harmony shift in Mongolian",
Lingua 67:283-327. North-Holland.

スウェーデンのアルタイ言語学者・音声学学者である著者が、当時としての先端的研究を駆使して、それまでの彼の研究にマイルストーンの意味合いをこめて発表した力作である。ただし、全体を貫く研究姿勢は、モンゴル語の母音調和という現象を生成音韻論的側面から捉えることにある。ただし、そこに通時的変遷というパラメータを加味しようとしている点に、単なる音韻理論の枠を超えようともがいていた筆者の姿勢が看取される。

方法論としては、先行研究をサーヴェイしたのち、音声の実態に迫り、これを十分に考慮しつつ音韻理論の構築へと導入している。もちろん、そこで援用される枠組みはチョムスキーとハレによる生成音韻論の枠組みである。この流れの中で、特に音声の実態に迫るという一事に、当時としては斬新さが見受けられる（もっとも、今日的レベルから捉えなおせば、生成音韻論と実験音声学はまったく異なる異分野の学問であって、音韻論的考察を加えるのに実験データは不要であるのと同様、音響解析を行うのに音韻理論で仮定される規則は無用の長物である。したがって、ごくフツウの音韻論的研究では実験データは取らない。データをとる音韻論は、唯一「実験音韻論」だけである）。

ところで、音声の実態には、サウンド・スペクトログラムを用いた音響音声学的方法で迫っている。ちなみに、ここで少々テクニカルな側面からマニアックな裏話をさせていただけば、1980年という年代はまさにアナログからデジタルへの過渡期であり、筆者 Svantesson も手に入れたばかりのデジタル・サウンドスペクトログラムを用いている（原著の290ページ参照）。このため、フォルマントの読み取り技術に関して、不慣れに起因

するエラーを生じている可能性が指摘できる。

たとえば、彼は論文の 293 ページで私の /u/ 母音に対する第 2 フォルマン
トの値が自分のものと一致していない点を批判しているが、彼の読み取り
方法は、いわゆる LPC などに代表されるアルゴリズムに寄りかかった安易
なやりかたであり、決して FFT と SPG とをすり合わせた上で最終的な「読
み」を判断した結果の所産ではないものと推測される。そのことは、たと
えば 291 ページに示されているフォルメント数値一覧において歴然として
いる。すなわち、305Hz とか、805Hz とか、2115Hz などなどに見られる 1
の桁の残し方を見れば窺知されるのである。

さて、話を本筋に戻すと、以上のようにして音響音声学的観点からの実
験研究によってハルハに代表される東部方言だけでなく、バーリン、シリ
ンゴルなど西部の諸方言にも注目した結果、モンゴル語の母音調和は長い
年月をかけて硬口蓋の位置における舌調和から、咽頭の位置における開口
度調和へとシフトしてきたものである、と結論付けている。また、この解
釈によると、今日東部方言に見られる「咽頭位置の調和」は、トウングー
スやアフリカの諸語と同じタイプになる。ということは、生成音韻論的規
則を立てる際に、よりいっそう一般性の高い原理としてモンゴル語の母音
調和を捉えることができるという主張である。

しかしながら、それならばトウングースやアフリカの諸語の母語話者と、
現代モンゴル語の母語話者とが、母音調和を聞いたり話したりする際に、
似たような脳神経的特徴を表出しているのか？ 少なくとも、このことが
立証されない限りは、単なる記号操作に基づく詭弁に過ぎないのではない
か。

それと、もうひとつ。Svantesson は、上の結論を導く際に音響音声学的
解析結果（しかも、その値にも問題があった）に 100% 寄りかかった解釈
を施しているという点にも引っかかるところがある。その理由は、そもそ
も音声情報というものは、最終的に聞き手の大脳を刺激して、そこで脳神
経パルスに変換された後、発出者のメッセージが何であったのかを受容者

が認知理解するところに本質があるのであって、その途中の段階に顕現する生理・音響的諸特徴は、単なる通過点に過ぎないからにほかならない。

「すべての解は音響データの中にある」といったスローガンは、もはや色あせた前世紀の遺物でしかないのである。

9. 城生佰太郎 (2001) 『アルタイ語対照研究——なぞなぞに見られる韻律節の構造——』、勉誠出版

第3章の p.92 から述べられている、現代モンゴル語の表記法に関する部分が重要である。現行のキリール字正書法は、かつて民族文字で表記されていた語末および音節末の弱化母音を原則的に表記しない方針をとった。しかし、このやり方が不徹底であったため、きわめて例外の多い煩瑣な正書法となった。本書では、その理由までは言及していないが、これは明らかに文字の有する「表語機能」を軽視したか、見落とした結果こうむった当然の結果であったと言える。要するに、これを一言でいえば「アホな正書法」ということになる。

ところで、これからこの分野で研究を行おうとしている後進のみなさんへの貢献として重く見ておきたい部分は、なんとと言っても p.102 以下に論じられている「中強母音」の提唱にある。従来説では、「強」と「非強」の2種としてまっぴたつに割られていた現代モンゴル語の短母音に対し、ピッチが高くなっている非頭音節の非強母音を「中強母音」と命名することによって、第2音節以下の短母音を一視同仁することへの警鐘をガンガンと鳴らした。

したがって、今後の見通しとしてはピッチをになうとされる非頭音節の「中強母音」が、実際にはどのような物理量を示しているのかを精査し、あわせて先行研究における指摘に対しその真偽のほどを検討する、という方向性が考えられるのではないか。まあ、その結果、「中強母音なんてナンセンス！」などということになるやも知れず、そのあたりには後進のみなさんの知的好奇心およびプラスアルファ的な何かを掻き立てるものが潜

んでいるかもしれない。

10. 城生佰太郎 (2005) 『モンゴル語母音調和の研究——実験音声学的 接近——』、勉誠出版

モンゴル語学の領野に身を置いて、はや35年。学究人生において、まさに実りの秋を迎えた著者城生佰太郎が、自家薬籠中の物とする実験音声学的方法によって、現代モンゴル語の母音調和を、(1) 生理、(2) 音響、(3) 聴覚、の3方向からバランスよく追究した、渾身の力作である。国際的にも類を見ない、究極のモンゴル語母音調和研究がここに出現した！ と、まあ宣伝文句はこれくらいにして、論文執筆を考えているみなさんとの絡みでは、なかんづく第1章のp.66以降で扱っている弱化母音の音響音声学的分析に、見るべきところがある。

すなわち、この論の著者城生佰太郎によれば、弱化母音のレベルでは(1) 男性・非円唇、(2) 男性・円唇、(3) 女性・非円唇、(4) 女性・円唇、の4類を截然と区別しなければならないことが主張されている。この事実は、たった1種類の/a/さえ認めれば十分であるとする Trubetzkoy 氏の音韻論とはかなり勝手が違うので、特に音声学的研究に専念しようとしている学徒にとっては一種のカルチャーショックを受けること必定であろう。

しかしながら、第2音節以下に立つ弱化母音の音韻論的解釈を別にして、

- (1) ピッチの物理量と認知的側面との相関性に注目しつつ、弱化母音に関する音響音声学的再現性の確認を行うこと、
- (2) 男性母音の後と女性母音の後で、ピッチに有意差があるかどうかを検討すること、

の2点は、仮にこれから音韻論の道を歩もうと志すとしても、とりあえずは検討すべき課題としてここに指摘しておきたい。

【参考文献】

- 金田一春彦 (1967) 「音韻論の単位の考」『日本語音韻の研究』: 40-57. 東京堂出版
- 城生佰太郎 (1997) 『実験音声学研究』、勉誠社
- 城生佰太郎 (2000) 「杉藤美代子著『日本語音声の研究 全七巻』書評」、『国語学』第 51 巻 1 号: 133-139. 国語学会
- 城生佰太郎 (2001) 『アルタイ語対照研究——なぞなぞに見られる韻律節の構造——』、勉誠出版
- 城生佰太郎 (2005) 『モンゴル語母音調和の研究——実験音声学的接近——』、勉誠出版
- 城生佰太郎・三上 司 (1981) 「モンゴル語のアクセント——オートセグメント理論による分析——」、『文藝言語研究』言語篇 6 号: 143-165. 筑波大学文芸・言語学系
- トゥルベツコイ (1980) 『音韻論の原理』長嶋善郎訳、岩波書店、(N.S.Trubetsky, 1939: Grundzüge der Phonologie)
- 服部四郎 (1951) 「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』19・20 合併号: 68-103. 日本言語学会 (服部四郎論文集『アルタイ諸語の研究 II』: 319-372、三省堂、1987 に再録)
- 服部四郎 (1973) 「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」『言語の科学』第 4 号、東京言語研究所
- 服部四郎 (1975) 「言語音の耳による観察と機械による実験」『音声言語医学』16-1: 6-15. 音声言語医学会
- 早田輝洋 (1998) 『音調のタイポロジー』、大修館書店
- レン・トヤー 「音響音声学によるモンゴル語弱母音の一考察——オラダ方言における解析」『城生佰太郎博士還暦記念論集 実験音声学と一般言語学』: 88-98. 東京堂出版
- Батгүлга, Ч., М.Лайхо,(1999):*Халх-Монгол Авианы Дуудлага*, У.Б.
- Лувсанвандан, Ш.(1968):*Орчин цагийн Монгол хэлний зүй*, У.Б.
- (1982):*Орчин цагийн монгол хэлний эгшгийн тогтолцоо нь. Хэл зохиол судлал XV.29-33*. У.Б.
- Надмид, Ж., Ц.Жанчивдорж, Б.Рагчаа(1968):*Монгол хэлний зүй, Авиа зүй, Зөв бичих дүрэм*, Ардын Боловсролын яамны Хэвлэл, У.Б.
- Төмөрцэрэн, Ж.(1968)*Монгол хэлний үе эс бүтээх эгшгийн учир*, Ш.У.А.Мэдээ No.1, pp.61-67, У.Б.
- (1970):*монгол хэлний үе хураагдах ёс*. Хэл зохиол судлал VIII.179-200. У.Б.
- Цолоо, Ж.(1967):*Монгол хэлний Авианы өгүүлэгдэх ёс*, БНМАУ Гэгээрлийн яамны хэвлэл, У.Б.
- (1976):*Орчин үеийн монгол хэлний авиа зүй*. У.Б.

<註>

- 1 今日では「蒙古語」はいわゆる差別語彙に該当する。「モンゴル語」が妥当な表現だが、原著を尊重して、ここでは現代にふさわしい表現には改めない。
- 2 事実は、長母音だけでなく二重母音も同様の特性を有するが、トゥルベツコイは見落としている。
- 3 城生佰太郎（2005）は、*sound spectrograph* を用いて一部の弱化母音を検証しているが、この研究の主眼が母音調和に置かれていたため、本格的な検討は行っていない。
- 4 注1に同じ。
- 5 城生佰太郎（1997:287ff）および、城生佰太郎（2008）の第10章「音節論」などを参照。
- 6 服部四郎は、音韻論的観点から母音を表記する際に母音調和を重く見て、男性母音と女性母音をウムラウトの有無によってパラレルに扱った。しかし、本稿における音韻論的表記にはこの考えを採択していない。
- 7 この本では、アクセントを「強さ」の面からしか捉えていないので、長母音や二重母音も短母音と同等の扱いになっている。しかし、高さの面からもアクセントを捉えた服部四郎（1951, 1987:352）では、原則として第1音節に強さを認めてはいるものの、「ただし、第2mora以下に長母音または二重母音がある時には、それらの母音の初めの部分にある」としている。